令和５年度笠岡市まちづくり活動報告会の結果報告

１　日　時　　令和６年１月２７日（土）１３：３０～１５：１５

２　場　所　　笠岡市保健センター　ギャラクシーホール・ロビー

３　主　催　　笠岡市（協働のまちづくり課）

４　目　的　　笠岡市では，住民主体のまちづくりを推進するため，地域活動を行う町内会や公民館など，様々なネットワークでつながる住民自治組織「まちづくり協議会」の運営や活動に支援を行っている。

報告会を通じて,「まちづくり協議会」とは何か，その取り組みをわかりやすく紹介し，市民に広く知ってもらい，地域のまちづくり活動について考える機会となるよう開催する。

５　出席者

＜笠岡市＞　小林市長，松浦副市長

＜来　賓＞	笠岡市議会	議長	妹尾博之　氏
	同上	副議長	藏本隆文　氏
	同上	総務文教委員長	大本邦光　氏
	同上	総務文教副委員長	栗尾典子　氏

＜発表者＞

①吉田地区まちづくり協議会

「吉田地区まちづくり協議会活動報告～公民館との連携～」

発表者　吉田地区まちづくり協議会　会長　廣井滋季　氏

②白石・島づくり委員会

「白石・島づくり委員会の活動～島の未来計画づくり～」

発表者　白石・島づくり委員会　天野正　氏

③農と暮らしの市実行委員会（令和５年度志縁型補助金交付団体）

「農と暮らしの市実行委員会～生産者と消費者をつなげたい～」

発表者　農と暮らしの市実行委員会　伊木大介　氏

＜コメンテーター＞

ノートルダム清心女子大学　現代社会学科教授　二階堂裕子　氏

特定非営利活動法人　岡山NPOセンター　地域振興センター長　高平亮　氏

６　来場者

130名（報道発表：約130名）

まちづくり協議会：22地区70名

地域おこし協力隊：2名

市議会議員：7名

その他一般参加：15名

（参加者の主な所属団体名：福山市，栗谷川虹顕彰会，報道機関ほか）

市職員：36名（地域担当職員：21名，その他職員：15名）

７　事例発表の概要

（１）吉田地区まちづくり協議会

「吉田地区まちづくり協議会活動報告～公民館との連携～」

・吉田地区は吉田、関戸、尾坂の３地区に分かれている。笠岡市の北部に位置し、人口約２，４００人、世帯数約１，１００世帯の農村地帯。農業規模は小さく、ほとんどが兼業農家。小規模だが団地が造成され、市内外への通勤のベッドタウンでもある。２０００年からの２３年間で人口が約１，０００人減少。高齢者の一人住まい世帯が増えてきた。

・昨年１０月末時点で６５歳以上の高齢者が９６０人。高齢化率は４０．３％。平成３０年からは吉田地区に生まれた子どもの数が毎年１桁台。

・今年度している活動を紹介する。広報紙の発行は年５～６回を目指している。まちづくり活動支援事業では、住民参加のまちづくり活動が継続して行われるよう、地域の各種団体の活動を支援している。休耕地対策事業では、地区内に増えてきた管理の行き届かない休耕地の対策として、花の種をまく活動を支援している。まちづくり協議会でも休耕地を借り上げて、コスモス畑にするよう取り組んでいる。それと、花壇の維持による

環境美化活動として、地区内に数カ所ある道路花壇に年２～３回花苗を植える活動を支援している。

・次に、吉田マッププロジェクト。これが公民館と連携した活動になる。活動のきっかけは、新吉中学校の生徒が総合学習の中で、吉田のいいところをみんなに知ってほしいと思い作った「吉田マップ」だった。

・生徒たちの手作りのマップは生徒自ら出演した吉田の紹介動画も作られているが、学習活動の一環のため、校内で公開されたが残念ながら吉田地区内への配布は無く、せっかく作った動画も一部の住民が見れただけだった。

・役員会で中学生のマップを紹介すると、「紹介したいいいところはまだたくさんある。中学生のマップをもっと発展させたマップを作って、地区内外に配布し、吉田のいいところを知り、訪れてもらえるようにしたらどうか」という意見が多くあった。

・まちづくり協議会の活動として、新たに「吉田マップ作成プロジェクト」という活動を始めたが、役員会の中で話し合いを始めると、役員の中だけではマップ作成するのに人数不足、面白いマップのアイディアが出てこない、イラストを頼める人材の情報がない、紹介動画の編集ができる人がいないなど、問題点が出てきて前に進まなかった。

・そこで、公民館に協力をしてもらい人材の募集をしたが、必要な人材を集められなかった。

・公民館長のアイディアで、令和５年度から公民館の自主講座として、「吉田マップ講座」を開設。そこでマップ作成を進めた。講座は２ヵ月に１回程度開催。12 月末までの講座でできたマップはＡ３版の両面印刷で、Ａ４版４ページに構成する。

・地区全体の地図を表紙にして、２～４ページに吉田、関戸、尾坂の紹介をしている。史跡や見てもらいたいところを紹介。発行は令和６年度を予定。地区内には全世帯配布予定。残ったもので市内外の団体や公民館などに送る予定。

・できたマップは、住民の郷土愛を育むイベントや、マップに載っているところを巡るウォークラリー等の開催、地区外の方に吉田を訪れてもらうための観光案内マップとしての利用を考えている。

・次の段階として、３０年前に吉田公民館で編集・発行された「史跡ガイドブック～ふるさと吉田の史跡・観光の手引き～」を現在の実情に合わせて再編集し、再発行を考えている。

（２）白石・島づくり委員会

「白石・島づくり委員会の活動～島の未来計画づくり～」

・令和４年度から「島の未来計画づくり」と題して始めた。全島民アンケートを中心に発表する。

・白石・島づくり委員会は、１９９９年に第２回島の大運動会白石島大会を契機に、団体間での問題共有を目的に結成。その年に島内広報紙を創刊。「島の盆、白石踊りの鑑賞・体験ツアー」運営を始め、現在まで２５年間続いている。

・当時の人口は８００人近く、高齢化率５０％弱で、幼・小・中学校があり、漁業、石材業、観光業も比較的盛んで、海上交通、商店も持続可能な状態だった。現在では、人口３６０人余り、高齢化率７６％を越え、後期高齢者の我々が次の１０年にどのように島で生きるかが問われている。そのための未来計画づくり。

・現在の島の取組を紹介する。２０２４年１月で創刊３４２号を迎えたふるさと新聞は、当初は公民館のパソコン教室から始まり、白石・島づくり委員会との協働に発展。島内環境整備活動は、古くから大切にされた辻の仕事の継続が中心。国際交流ヴィラは、１９９１年に岡山県が建設し、２００８年に笠岡市に譲渡された後は島づくり委員会が運営している。現在は地域おこし協力隊を卒業したムヤさんご夫婦が中心となり運営。２０２０年から規約を作り頑張っているイノシシ部会は、現在は部員数２４名で、箱罠８箇所、囲い罠１箇所を管理。捕獲数推移２０２０年は２８頭、翌年は２４頭、２０２２年は６２頭、本年は１２月で既に６０頭を越えている。捕獲が増えている現状なので箱罠の増設を準備中。「くわのみすくすくえん」は、令和４年５月に各方面の尽力や島民の協力で開所。現在４歳児２名が元気に通っている。アンケートでも要望の多かった高齢者の移動サービスを中心に、部会を立ち上げた生活支援サポーター事業で、島にグリスロを導入。令和４年２月からスタート。地域おこし協力隊の若者の力を借り、LINE や Google カレンダーを使ったコーディネートで、利用者とサポーターを結んでいる。将来的には、観光客も対象にした多目的なグリスロ活用を目指していきたい。現在のべ事業登録者数３２名。サポーター数１６名。毎月平均約９０件対応。

・今後のメイン活動の白石島未来計画策定については、アンケートの中身や回収方法は協働のまちづくり課やみんなの集落研究所の助言・協力で、時間をかけて議論し、取捨選択して進めた。アンケートは小学生以上３１２人に配布。回収数２５５枚、回収率８１．７％。１０ブロック中４ブロック回収率１００％。行政協力委員に配布と回収を依頼。昨年１月のアンケート集計会には島出身の大学生も応援に駆けつけた。

・令和５年５月の第１回アンケート共有会には多くの島民が出席。島の現状満足度は海上

交通、島内移動手段、防災以外は満足度が高く、この３項目が喫緊の課題。

・７月、９月に第２回と第３回の共有会を開催。この２回は初めての参加者のフォローアップとまちづくり計画検討会のテーマを防災として開催。検討会には地区自主防災会からも多くが参加。地区を４ブロックに分け、地図上に危険箇所、要支援者宅など課題ごとに整理してマッピング。

・１２月からは、空き家対策をテーマに、地図上への空き家の落とし込み、その中ですぐ使えそうな空き家や修繕が必要な空きやなどに分類してマッピング。空き家の多さに改めて驚いた。次回は有効活用や利用方法など実りある計画を進めたい。

・アンケートで出たみんなの意見を元にテーマを決め共有会を行い、地域への周知と共有、集約を進め未来計画づくりに活かしている。

（３）農と暮らしの市実行委員会

「農と暮らしの市実行委員会～生産者と消費者をつなげたい～」

・２０２３年５月と１１月に開催した「農と暮らしの市」について発表する。

・まず、自己紹介。笠岡市で野菜農家として就農８年目のナナイロファームの伊木です。２０代前半に洋食店を友人と経営しており、それまで全く野菜に興味なく過ごしていたが、料理をするうちに野菜の魅力にはまり自分で野菜作りをしたいと思うようになり、２年後に店をやめて、今から８年前に笠岡市認定新規就農者になった。２０２２年までは笠岡市有田で野菜を栽培していた。現在は笠岡市吉田で就農している。

・就農３年目頃から、自分が育てた野菜はどんな人が食べてくれているのだろうと考えることがあり、消費者の方と繋がることのできる場所を作ろうと、有田の農家さんにも声をかけ野菜の直売所を作った。直売所は２０２３年１２月で閉めることになったが、福山や岡山など遠いところからも足を運んでくださり、今もなお野菜を直接買いにきてくださるなど農業をやっていてよかったと思う。

・この直売所をしているときに，今の実行委員会メンバーの、井笠など地域食材を使用してお菓子を作られているパシオンの山脇さんに出会い、もともと作ることが好きだったこともあり、小さなお子様から野菜嫌いの人まで地元の野菜を食べてほしいという思いから、「有田商店」というイベントを中心に野菜のケーキやお弁当などを販売する店を作った。その後、地域おこし協力隊の岡本さんほか，笠岡に思いのある５人の方々に協力をいただき、笠岡や笠岡近郊の農家さんをはじめとした農の魅力をもっと多くの人へ知ってもらうため農と暮らしの市を開催した。

・農と暮らしの市では、野菜、果物、製品はもちろん、食べ方や栽培方法などを消費者の

方に農家さん、飲食店さんが直接伝えながら販売し、また、消費者が普段気になっていることを農家さんに聞くことのできる場所になるよう様々な企画をした。

・８年農業をしてきて感じてきたことを実行委員の中で話し合い、このプロジェクトの中で実現したいことを決めた。その背景には、人手不足、後継者不足、農業の経営の難しさ、動物などによる被害、耕作放棄地の増加、食の安心・安全などといったものがある。

・このプロジェクトで実現したいことは、耕作放棄地の拡大を抑制し、地域を活性化させる循環を生み出し、農業・食・若者という観点から笠岡の魅力をアップさせ、関係人口、移住・定住にもいい影響をもたらせること。そして、おいしさと安全にこだわった野菜・果物の魅力と価値を伝えて、地産地消による地域に根差した小さな農業の再生による、地域の魅力向上とコミュニティの再生への寄与。

・笠岡近郊の農家や地域の素材を使った料理等を提供する、農業をテーマとしたマルシェを開催し，井笠・備後地域の野菜・果物のおいしさ、魅力や、生産者がどんな思いで農業や自然に携わっているか知ってもらい、販路の創出、農業者の収益向上、新たな若手農業者の育成ができる。生産者や店同士の連携により、地域商社のような機能を作り、販路を創出。

・２回ともあいにく雨だったが、１回目は古代の丘スポーツ公園で開催。約３００人が来場。新山地区自治会のはと麦味噌も出店し好評。２回目は干拓にある太陽の広場イベント会場で開催。約４５０名が来場。

・苦労したことは、野菜や果物は農家さんにより旬が違ったりして、開催日を決めるのがほんとに難しかった。農の魅力を消費者にわかりやすく楽しく伝えるため、井笠近郊で野菜を生産している農家さんと、その野菜を使用してくださる飲食店を横のブースになるよう並べて、食べ方や野菜のおいしさなどを共に伝えながら販売した。インスタグラムを主に活用して事前に生産者の魅力発信をして、消費者が購入した後も繋がれるようにした。

・成果のあったことは、出店者同士が互いの思いや情報交換を行うことで繋がりを持てるようになったこと。２回目の開催では、地域おこし協力隊のフードコーディネーターの金藤さんに協力いただき、野菜をメインにした料理ショーを実施。来場者に喜んでいただけた。

・今後については、農の魅力を伝えていくために、井笠近郊で思いのある農家を増やし、それらの食材を大切に扱ってくれる飲食店にも協力いただき、長く愛される農と暮らしの市を行っていきたい。そして、そのイベントをとおして地域の方との関わりを深め、新たに笠岡で農業をやりたいという仲間づくりをし、年々増えている耕作放棄地の防止

につなげていきたい。実現まで時間がかかるが、これからも生産者や飲食店さんとともに消費者の方、農業を始めたいと思っている方に発信していきたい。